

薦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年11月15日・第10号・〈越谷との関係を考える〉号・発行・旧日光街道・越谷宿を考える会

・越谷に来たこと、あるんだよ！・



薦重・日光参詣の途中で・・・

馬琴・妻の母の葬儀で・・・



写楽・息子の養子入りで・・・

薦重に見出された馬琴、写楽はともに「越谷」に関係あるヒトたちなのですが、彼ら、薦重、馬琴、写楽は実際に越谷に来てくれたことがあったのか～越谷の人間にしては非常に興味があるところ、心配なところですよ。

大丈夫です。いま、わたし達の住んでいる越谷に、江戸時代の三人は、来てくれていたようです。うれしいことです。埼玉県が広しといっても、他の市町村で、こんなに素晴らしいことは起こっていません。越谷市だけが、その幸運に恵まれたよう。なんとうれしいことではありませんか。

☆まずは、薦屋重三郎さんの越谷ご来訪のことを～

薦重さんは生まれ吉原、育ち吉原のヒト。23歳で吉原の大門口五十間道^{おおもんぐちごじゅうけんみち}で貸本、小売りの本屋を始めたのが、最初の商売。それが面白くて旅になど出るヒマもない。その間に、日が経って、旅らしい旅は、この日光街道を歩くのが初めてだったのではないのでしょうか。無理やりのように連れ出したのは、作家の山東京伝^{さんとうきょうでん}と同業の本屋の鶴屋喜右衛門。鶴屋と薦屋との間に版權をめぐってのわだかまりがあったのを、直してやろうとの京伝の思いやりがあったとの説もあるようです。

京伝のことを書いた曲亭馬琴^{きょくていばきん}の「伊波伝毛乃記」^{いはづものき}にあるのが「天明末」^{てんめいまつ}（天明末の9年＝1789）です。日光東照宮、中禅寺に参詣したとあります。

日光に向かうのですから、薦屋の耕書堂^{こうしやどう}（天明3開店）も、吉原も日光街道近くにありますが、日光街道御成道^{おなりみち}は將軍専用の道路で一般人は通行できませんので、薦重一行が日光に行くためには、越谷宿を通る日光街道しかなかったのです。



薦重、鶴屋喜右衛門、山東京伝の三人は、日光街道を、越谷宿を歩き、東照宮、中禅寺湖を楽しんで江戸へ戻ったことでしょう。

これが、薦屋重三郎が越谷を通った証拠の記述です。

薦重が日光街道を通った資料としては、次の通りです。

○山東京伝年譜稿^{ねんぷこう} 水野 稔著 ペリカン社刊 1967

○近世物之本江戸作者部類 曲亭馬琴著 徳田 武校注 岩波書店刊 2014

☆次は、曲亭馬琴の越谷訪問のこと～

これこそは、記録好きの馬琴さんの記録にありました。

きょうわ
享和元年（1801）6月です。奥さんであるお百ひやくさんのお母さん（実母・はつさん）が荻島村の弟・六左衛門さん宅でなくなったときに、馬琴さんがそのお宅に駆けつけ、葬儀参列だけではなく、お手伝いまでしたようです。旗本の用人という「武士階級」の最下位でも、その身分にプライドのあった馬琴さんに、お百さんへの大きな愛があった証拠でしょう。



○その後、馬琴さんは～

馬琴さんは、「読本よみほん」という、自らが好んだ水滸伝などのジャンルの世界に自らの場所を見つけたのです。文化4年（1807）の「椿説弓張月ちんせつゆみはりづき」のあたりに自信を持ち、文化11年には「南総里見八犬伝」の刊行を始めました。これは、その後、28年かかって完結した、98巻、106冊の、まさに超大作でした。

そして、その間に、馬琴さんの身に大変なことが起こりました。それは馬琴さんの失明です。60歳代で目を病み、73歳で完全に失明したのです。

八犬伝の次巻を待ちかねる読者の期待を裏切るわけにはゆかず、こうじゅつひっ き
口述筆記に頼ろうとしましたが、時代小説で難解な字が多く、途中でギブアップする筆記者が続出。息子は医師で、文学畑も好きだったようですが、若年死。嫌がっていた息子の嫁を説き伏せて、3年の間、無理をお願いして、ようやく完成したのです。馬琴さん、ご家族さま、ご苦労さまでした。

☆東洲齋写楽の場合は～

なにしろ、写楽さん自身がわからないヒトで、まして、越谷へ来たか～などの証拠提出は大難問。東洲齋写楽＝齋藤十郎兵衛～であるとして、十郎兵衛は能楽者であり、教養人ですから、日記などをつけていたかも知れない～ことは考えられますが、齋藤家がなくなっている現状では、文書などの発見は無理です。写楽が越谷に来たかは、推論しかないのです。

○推論は次の通りです～

江戸時代に、八丁堀地藏橋に二軒のお宅が並んでました。一軒は、村田^{はる み}春海という国学者の私宅。村田春海の本家は干鰯問屋^{ほしか}を営む豪商。学問の道と商売の道との狭間で悩み多く、^{まぎ}紛らわせるための^{ごうしゃ}豪奢な生活は^{じゅうはちだい}十八大通の一人にも挙げられましたが、家産を傾け隠居。その後は、国典^{かも の まぶち}を賀茂真淵に学び、^{ち かげ}加藤千蔭とともに江戸派歌人の双璧をなした人物。

お隣には、^{あわ はん}阿波藩の能役者、齋藤十郎兵衛が住んでいました。

村田家は、家を継ぐ子どもがなく、春海の国学者仲間の越谷・^{おんま}恩間の渡^{こうよう}辺荒陽の次女・^{たせ こ}多勢子を養子に迎えました。多勢子は江戸在住の大名夫人や娘の家庭教師をしつつ、国学、歌道を学び「都下に一人の女あり」と称される才女でした。春海没後、結婚せず、跡継ぎが必要なため、お隣・十郎兵衛家の男の子を養子とし、^{はるみち}春路と名付け、国学者に育てたのです。

このような養親、養子の決定段階で、十郎兵衛が息子を伴って、多勢子の恩間の生家を訪ねることは十分ありえることではないでしょうか。むしろ、越谷に来たことはまったくなかった～ことはありえないと思われれます。